トネクター

はんでぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トネクター

【Ｎコード】
Ｎ４６７０Ｙ

【作者名】
はんでぃ

【あらすじ】
トネクトという超能力の持ち主が通う学校、トネスクに通う生徒達が戦うお話。

火奈

「わあああああああっ！！辞めてください！私達が悪うございましたあああああああっつわあああああ熱い！熱い！助けてくれええええああああああ！！」

ブワアアアッ

路地裏で、炎が燃えていると通報を受けた警察は、動かない。警察署で座っているだけだ。

「またアイツか～。どうにかして捕まえたいんだけどなぁ…。あんな熱い炎なんていくら警察の私達でも無理だよなぁ。それに、顔も見たこともないし…。」

「――ハァ…。誰が許すかってんだ…。だが、一つ頼み事をしたい。頼み事をこなしたら殺さないでおいてやる。かもな。」

「頼みごと…？は、はひぃっ！！裸踊りでも、なんでもさせてください火奈さまさまあああ！」

「じゃあ、今すぐ食料を調達して来い。ちなみに――警察や商人。とにかく誰かに助けを貰おうとしても無理だぜ？言う前に焼き殺す。」

「はひぃ！！」

「とにかく、お前は何も言わず食料をとりに行って来い。」

「はひぃ！！今すぐに！」

何分か経過して、這いずりながら血まみれでコンビニの食料を抱きかかえ戻ってきた。

「ハァハァ…。持って来ました…！！盗んで、殴られて。大変でした…。でも食料は安全安心ですのでどうか…命だけは…！！」

「ふぅん。パンか…。」

抱きかかえてきた血まみれのパンの袋を一瞬で燃やし、パンを口に入れる。
「あむ。ほむほむ…。悪くはないな。」
「おおう！！では、命はお助け」
「死ね。」

ブアワアアアアアアアアアアアアアアア！！！！
一瞬にして血まみれで真っ赤な身体が炎でもっと赤く、紅く染まって炎が小さくなっていき、プスプス、と音を立てて真っ黒色の粉が残る。
「楽だったろ？他の皆は苦しみながら死んでいったんだ。お前は助かった。というべきだよな、痛みからこの俺が助けてやったんだ。あははははっはは！！！！」

――チュン、チュン、チュン。

「おはよ～♪」
「おはよ～♪今日もいい天気だよね！」
「ねぇ、知ってる？昨日また路地裏で出たんだって…！炎のトネクト持った奴！」
「うん、知ってる！名前も顔も性別も分からない謎のトネクト持ち主なんだってね！！」

「俺のことか…。」
一人ボソリと呟く。悪いことをしていない人間は勿論殺さない。どっかの悪いトネクト持ち主とは違い、罪のない人間は殺さない主義だ。人を殺すのだから同じだが。

「あ！みいちゃん達、おはよっ～♪えへへ～☆皆、朝早いねっっ」
「あ～比奈ちゃんだぁ～！！おはよう！！」

ピクリと動く耳。「ヒナ…ちゃんだ…と？」
炎、沸騰温度１００度を完璧に越してメラメラ音を立て、「ヒナ」
という少女を焼殺した。

「比奈…ち…ゃ…？」
少女の肉、跡形も残さずに燃やし、ただただ煙と悪臭が半径３０キロを包む。周りに人はいなく、ヒナという人物の焼殺を見たものはたったの少女２人。
「…こ、この殺されかたって…炎の…トネ…ク、ト？」
後ずさりしながら炎のトネクトを思い出す。殺すのは悪人と聞く。
「比奈ちゃんが…。焼殺された…？そんな…。私どうしたら…。」
二人の少女は、この場から離れられず、ただただ、涙を流して人生最大の瞬間を目の前にする。
「他に…ヒナってガキはいねぇか…？」

真後ろの路地裏から声が聞こえてきた。
「ふひぃ…！？」
二人の少女は身体がビクリと動き、真っ青になった。
「だっだだ…誰…？」

「問いに答えろ…。他に、ヒナってヤツはいねぇのかあっっ！？」
少女の周りがグルリと炎で包まれた。
「ひぃゃあ！！し、知りません！居たとしても私の知り合いにはいません！！！！本当です！」
二人の少女は声を合わし叫ぶように泣いた。すると周りの炎は消え、後ろに気配を感じた。　が、二人とも振り向くことなくお急ぎで立ち、走る。

「ハァハァ…。悪いなヒナさんよぅ…。俺さ、ヒナって名前のつく女…嫌いなんでい…。」

一人呟いていると後ろから声が聞こえてきた。
「ウチの生徒を殺したのは君かぁ…。ハデにやってくれたじゃないか。これじゃあ上の子でも無理だ…なぁ…。」
「ッ、誰だ！！」
振り向くとそこには老人が立っていた。

トネクト学校。

「うむぅ？ワシかぁ？ワシは、トネクト学校の学校長を勤めている本田じゃ。よろしくの。」
頭の毛はほぼ、なく、小さい身長で優しい一般の老人だった。
「はぁ…。なんだ、ビックリさせんなよ。じじぃ。」
「じじぃじゃなく本田さんとお呼びなさい…。まぁよい、若い者は素直が一番じゃからのぉふぉふぉふぉっ…。」
本田は『フォフォフォッ』と笑っているくせにたぁと何十本か抜けている歯を見せながらニタニタネタネタ笑っていた。

「人が死んだのを目撃してるくせに冷静だなじじぃ。何者だ？」

「じゃから言っとるじゃろな。ワシは、何者でもなく、校長先生じゃ。人が死ぬのは日常茶飯事。ただ、ワシの生徒だから少しおこっとるだけじゃばきゃもん。」

一瞬にして目から光がなくなったと思うとその場にしゃがみ、比奈さんの灰を集めだした。
「この子のお…、結構優秀じゃったのう…。逝くには早すぎる若さだしのう…。ああクワバラクワバラ…。」
灰をすべて集め終わると空にブワーーっと飛ばし、下を向く。
「この子も優秀じゃったけど、お前さん、もっと凄いの？名前はなんていうんじゃ？」

「俺…？名前なんて言う訳ないだろ、見ず知らずのじじぃなんかに…。」
「名前さえ教えてくれたら、いい場所を紹介してやろう。もっともーっと強くなって、世界一強くなれるかも知れんぞ。」

少しの沈黙の後、口が動く。
「ひ…ヒ。ヒナ。火奈。俺、火奈。」
「ヒナァ？可愛い名前じゃのう。」
自分の名前を名乗るのは初めてだった火奈。本田が言う『もっと強くなれる場所』を知りたいがために名乗った。
「じゃあ、ワシに着いて来なさい。ハグれるなよ？ふぉふぉふぉっ…。」
本田はゆっくりとマイペースではるか北を目指し歩いた。
そして、長かったのか短かったのか一言も会話を交わさずにとある学校へ到着した。
「ここ…じゃの。」
「ト…トネクト学校…？なんだそれ…、トネクトの学校…？学校ってなんだっけ…。」
「悩め若者。では、改めて。初めまして。ワシはここの学校長本田。これからトネクト学校に入学する『火奈』なにとぞよろしく願おう。」
あまりデカクなく、運動場といった普通の学校にあるものは無く、校舎とあと二、三個大きな別館らしい館がある。
「学校案内や見学も大事だがまずはクラス決めといこうじゃないか。校舎の左にある『クトルーム』へ来なさい。そこで火奈の実力を試し、実力にあったクラスへ行ってもらう。実力が高ければ高いほど良いクラスにいき良い授業を学べるぞ。もちろんだが一度入学したら帰れない。両親とは話を―――」

「早く「クト部屋」へ行こうぜ。俺の実力ってどれくらいなんだろな、あ。両親いねぇから。先行くぞじじぃ。」
「おおよい待て待て。両親がいないのか？ならば君はこれからずーっトこの学校で生活してもらうわけじゃが…」
「早く　行こうぜ　じじぃ。」

もうすでに火奈はクトルームの入り口前で座っており、本田からは米粒に見えた。
「…若者は行動力があるのぅ…うらやましいったらありゃりゃしない…。」

本田も火奈もクトルームに入り、本田は実力試験のルールが書いてある紙を火奈に手渡した。
「んっ…なんだこの紙。」「まぁ。よめ」

『～入学クラス決め実力テスト～　●真正面にある的を壊すこと。
～ルールはいたって簡単～　●けが人を出すな。●３０分以内に壊すこと。
～採点対象～　●時間　●威力　●態度』

「ふーん。じゃ、始めようぜ。」
「んじゃ、よーい始めじゃあああああ！」

タイマーの音が静まり返ったコトルームに響き渡る。そして3秒後だった。
「フゥー…、行くか！！」
ブワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアっっ…

火奈の口から炎が出てきた。的どころか、的をつけていた鉄の棒まで熱く熱く溶かした。
「ふぅ…結構炎出した後が鬼畜だ…。んで、どうなんだじじぃ。ルール守って時間も守ってやったぞ？」

「…よろしい…。」
大きなノートに続け字で書いてある字はどうやら本田以外は読めないらしい。
「君は———Yクラスに行きなさい。文句や口出しをしたらAクラスじゃぞ。」
「ヘイヘイー。」

階段などにとりつけられている学校全体図。どうやらFクラスは9階らしい。
「っちっ…、足疲れるぜ…Aクラスってよさそうに思えるけど悪いのかな…。んあ…ここだ。」

トネクト学校。（後書き）

前回は感想有難うございました＜＜
嬉しいです＜＜

抹茶味

「…ん…、新入生ってコイツか…？」
女顔でボーイッシュな感じの奴が席を立ち黒板の前に立ってチョークで大きく
『新入生』と書くとこちらに近づいてきて「名前は？黒板に書くから。」
「んあ…火奈っす…。」名前を照れながら言うと黒板に大きく『火奈』と書かれて少し周りがざわついた。
「俺、抹茶。　変な名前だけどお互い様だよな…、ははは！！」
とても美人なのに自分のことを俺と呼ぶ。この学校はおかしな奴が集っているらしい。
「あ…、えと、僕は、熊田…。よろしくお願いしますね火奈さん…。」
抹茶の次に立ち上がったのは『熊田』という人物。高校生くらいの背丈。明らかに弱そうだ。
「んと、俺は抹茶と熊ちゃんより弱いんだけど。塩田って言うぞ。きっと火奈ちゃんよりは年上だ。よろしくな…。」
次には一番後ろの席から出てきて名乗る。熊田よりかは年下で、抹茶よりは年上だろうと思われる人物。
「抹茶に熊に…お塩か…なんか笑える名前だなぁ。んで、俺は火奈であって火奈ちゃんじゃないからな。」
ドイツもコイツもまるでお米に見えた。それはとても弱そうで絶対自分が上と感じたからだ。
「君ぃー。自分が上って思ってる。お兄さんはね、心読めちゃうの。ンフフ…。」
前のほうでさっきからずっと火奈を見ていた人物が口を開く。どうやら人の心を勝手に読み、それをみんなに言っている
らしい。自分のことをお兄さんと呼んでいたのだが年齢的にきっと

３０歳以上の奴だ。
「なな…！！お前よりきっと俺のほうが上だぞ！？それより熊ちゃんのが上だと思うけど…。」

「――――ったく、勝手に心を読みやがって。まぁいいけどさ。絶対俺のが上だね。お前らがどんなコネクトを持ってるかなんて知らねぇけどよ、お前ら雑魚いでーす。って顔にさ、書いてんジャン。ははは！！」

美人で女の抹茶が叫ぶようにしてキレた。
「だーーらーー！お前言ったな！？俺、怒ったぞ。今めっちゃイラついたぞ。んだら勝負と行こうじゃないか。んー？」
「いいよ、望むところジャン。かかってコイよクソ女め。」
「んな…？今俺に向かって女って言ったな！？俺に向かってぇええええ！？」

すると火奈の後ろから、熊がボソリとつぶやいた。
「うぅ…、抹茶、男の子なんだよ…。女顔で、自分の事女って言う人が大嫌いなんだ…。」

自己紹介

「え、マジ！？女じゃないの？」
一瞬の油断を見せると脳天に矢がヒットした。
「いつわ！！」

「フフン、俺の矢はな、毒がもってあって3分は動けないのさフフン。」

「ま、抹茶ぁ…、新入生は誰だってこうでしょ？落ち着いたら…？」
抹茶がどやがおをしているすぐ横から熊田がつぶやき、抹茶の目を見つめる。
「んでもさぁ…。ううっ…はぁ…熊に見つめられるとどーも鳥肌が立っちゃう。ゴキブリはやーだぞ。はぁ。」
「ゴキブリィ？なんで僕が君を見つめているとゴキブリがいやになるのさ！！ゴキブリなんかより毛虫が…ぞわわ…。」
この教室に入ってきたばかりの火奈にはドイツがいい奴でどの方が先生なのか。もうここはどこなのかすら分からなくなってきた。
「わたちは真繰。『マクル』って呼んでね！」
背後から小さい小粒サイズの少女がニカリと笑い裾を引く。
「あん？お前どこの教室のガキだ、あん？」
「あわう！！マクルに手は出さないでね…！下級生だから弱くてすぐ死ぬの。」
急に横に現れた熊。
どうやら少しパンチをするだけで死んでしまう下級生らしい。ここの教室ではないことは確かだ。
「え？死ぬの？」
「うん、いつもは塩さんに任せてるんだけどいちいち面倒くさくっ

て…。塩さん最近戻してくれないの。」
「塩？あぁ、さっき言ってた塩田のことか…。よく覚えられない…。自己紹介的なのを新入生の俺様にしてやってくれよ。」

「いいよ火奈ちゃん。うふ★」
会話に入りもしてなく、耳で聞いてもいないのに後ろから吐息を耳にかけてくるオッサンがいた。
「ひう／／／…な、なんだ気持ちわりぃな。」

「オジサンは、李。３０歳以上のオジサンだよ★コネクトは、『心を読む』ってヤツかな。結構役に立つのむふふ★」
「…あ、僕は熊田です。熊って呼んでくださいね★中学3年生です。コネクトは『虫を操る』みたいなのです。」
「俺は抹茶。好きに呼んでもらってかまわない。年齢は秘密。コネクトは『毒弓矢』だと思うぞ。女じゃないぞ。」
「っ私は塩田。適当に呼んでくれ。年齢は…丸秘って言うことにしておいてくれ。李よりは若い。コネクトは『銃』とか『回復系』二つもっているのは生まれつき。」
「あたちはマクル★7歳です★熊の妹ですぐ死にます。でも塩ちゃんがいるから大丈夫なんじゃ★コネクトは『武術』なんじゃぞー★熊兄はよくいじめられるけどたまに」
「これ以上は言わなくていい！」
熊がマクルの自己紹介を最後大声でしめて終わった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4670y/

トネクター

2011年12月11日17時47分発行